レバノンでのパレスチナ難民・シリア難民支援を継続中

食糧支援を実施しています

6月と10月に山岳部に住むパレスチナ人シリア難民の1500世帯以上に食糧を配布。12月からの越冬支援も計画中です。

幼稚園と補習クラスは新年度が始まりました

難民キャンプの幼稚園、補習クラスには今年も子どもたちがたくさん参加しています。

子ども歯科、育児や女性のワークショップも始まりました

幼稚園では歯磨きを習慣に。

メンタルヘルスサポートを広げるために

厳しい生活を送る親子

レバノンではこれまで、現地の児童精神科医療機関であるファミリーガイダンスセンター(以下 FGC) と協力してパレスチナ難民・シリア難民が抱えるメンタルヘルスの問題に対処してきました。精神科医や臨床心理士の診療支援に加えて、今年は、地域に密着したソーシャルワーカーなどがメンタルヘルスに関する知識を得て、地域に出向いて活動するアウトリーチ（訪問）型の支援を行い、また家族向けのセミナー、メンタルヘルスに関する啓発活動、いじめ問題など子どもを対象とした人形劇、親子向けのセミナー、参加者間での意見交換など、地域でのイベントを予定しています。

まず、こうした活動を担う人材育成、研修の指導者養成を始めました。現場での経験豊富な専門家たちが講師を務め、レバノンの各難民キャンプから20人程度が参加し、イベントやセミナーなどで講師を務めるために必要な知識や心構えについても学んでいます。イベントやセミナーを通してより多くの人たちのところに支援を届け、戦争の経験、厳しい難民生活、経済的な苦しみなどから生まれる様々な心の問題に少しでも対応するつもりです。この事業を担当し、またシリア国内の支援事業にも関わる FGC のハウラ・ハラフさんが、現状と目的について語ってくれました。

「FGC は20年以上にわたり人々のメンタルヘルスの問題に対処してきました。多くの人々に認知され多くの人々がサービスを求めてセンターへやってきました。その中で精神障がい、学習障がい、発達障がい、知的発達の遅れなど様々な問題を抱えた子どもの問題を解決してきた実績があります。精神科医師をはじめ、臨床心理士、精神運動士、言語聴覚士など多方面からのアプローチによって問題に対処してきたのです。また、ソーシャルワーカーによる家庭訪問を通じた親への助言やアフターフォローなどを行うことで家族や近隣の人々も含めたアプローチを行ってきました。」

訪問型支援の必要性

「しかしレバノンではいまだにメンタルヘルスに関する認

知度や知識が乏しく、ネガティブなイメージを持つ人がほとんどです。メンタルヘルスに関する問題について知ってもらい、コミュニティのメンバー同士で自由に発言し、学び、話し合う場を設けることも大きな目的の一つです。また周囲の目を気にして必要な支援へアクセスしにくい環境があります。メンタルヘルスの問題は誰しもが抱える可能性があり、恥ずべきことではなく、早いうちから適切なサポートを受けることが必要であることを、コミュニティ内で周知していく必要があります。

そして支援をより多くの人々へ広げていくことです。今後は診療所に来たことがない人や、サービスについて知らなかった人も含めてサポートの範囲を広げていきたいと思っています。また、専門家やソーシャルワーカーなどといった人材が限られている中で、コミュニティの人々にもある程度の知識や理解をつけてもらうことで、隣人が問題を抱えた場合に適切に接したり、対処したりすることができるようになればと期待しています。」

期待される成果

「この訪問型支援は専門家の指導を受けたソーシャルワーカーが主体となって実施します。彼らは精神科医や臨床心理士のような専門家ではありませんが、各コミュニティの状況や文化、そこに暮らす人々について非常によく理解しています。この人たちが情報収集やセミナーを行うことで、人材面、資金面が限られた状況でも最大限の支援を人々に届けられることを期待しています。また、これまでの支援ではできなかった多数の人に対して啓発を進めることもできます。子どもの場合はできるだけ早い段階、少なくとも7歳ごろまでに気づき、対処をすることが重要です。コミュニティが理解を示すことで、子どもたちが心の問題を打ち明ける恐怖や偏見をなくしていくことが可能になります。」

レバノンの難民を取り巻く環境

「レバノンの状況は難民にとって非常に深刻です。パレスチナ難民は、経済面、保健医療、住居、教育などの、生きていくうえで最低限必要とされるサービスを受けられず、物価も高いため、非常に厳しい生活を強いられています。例えば、パレスチナ難民の子どもの多くはUNRWAの学校に通っていますが、最近の資金不足の影響で学校が合併されたり、閉鎖されたりしています。運営されている学校でも、以前は40人ほどだったクラスが50人以上になり、授業時間も短縮されてしまい、先生がそれぞれの子どもに気を配ることができなくなってしまいました。

パレスチナ難民には市民権がなく労働権も制限されているため、毎週のように人々は抗議の声をあげていますが状況は改善されません。それどころか、最近では難民の労働に関する取り締まりがより厳しくなり、難民を受け入れ、滞在させることに対して否定的な風潮が強まっています。シリア難民に関しても状況はほとんど変わりません。シリア難民の多くがビザ更新の時期になっていますが、政府は更新を認

ハウラさん

めず、シリアへ帰そうという動きが強まっています。レバノン国内のパレスチナ人やシリア人は、「難民」であっても住民として扱われるべきなのです。

国外へ追い出そうという動きが強まる中では、難民たちは未来を考えることが以前にも増して難しくなってしまいました。このような状況はメンタルヘルスに直接大きな影響を及ぼします。これまで以上にメンタルヘルスに関するサービスが重要になってくると予想されます。」

シリア国内の状況

「4月に、シリア危機以降では初めて、私はシリアを訪問しました。以前に行った時とは打って変わって、国境はもとより県境などで多くの厳重な検問が敷かれ、特に難民キャンプ訪問の際には多くの検問所を通過する必要があり、緊張感が高まっているのが感じられました。破壊されたパレスチナ難民キャンプが多い中、残ったキャンプ内は非常に混雑しており、崩壊した建物も多くみられました。住民の話によれば、難民の収入は高くても月100ドル程度と、経済的にも非常に厳しい生活を強いられているとのことでした。

当然、人々のメンタルヘルス状態は悪く、多くの問題を抱えていました。ほとんどの家族はメンバーの少なくとも1人が、身の危険や経済的な理由で国外や国内の別の地域へ避難しており、家族が離ればなれで暮らしています。何度も移動を強いられてきた人もいます。人々は、トラウマや悲しい記憶を背負って生きています。そういったことからメンタルヘルスの支援に対するニーズが非常に高くなっています。

特に、2011年に起こった危機はシリアに暮らす人々にとっては初めての紛争の経験であるため、危機的状況に対処する術を持っていません。ここがレバノンと大きく異なるところです。レバノンは長期の内戦を経験し、その後長い時間をかけ、復興が進んできたことで、メンタルヘルスに対処する術を培ってきました。もしかしたらシリアはレバノンよりも、メンタルヘルスに関する教育や学術的な研究は進んでいたかもしれませんが、シリア国内の心理専門家は大きな病院での診療や研究がメインで、地域住民や子どもの問題に対処するという経験がほとんどなく、レバノン国内の心理専門家に比べ、圧倒的に現場経験や現場での実績が不足しています。専門家の数が人口に対して非常に少ないことも相まって、シリアでは十分なメンタルヘルスの支援が行われていないのが現状です。ですから、シリアで心理支援に携わる人たちをレバノンに呼び、様々な実際的な研修をすることでも支援をしています。」